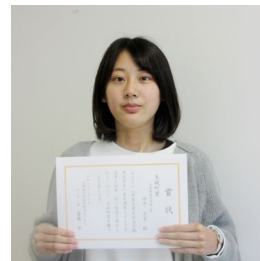


玉城町賞



文学部国文学科 2年  
田中 美有

<p><b>地域課題に対する課題の背景とその本質</b></p>	<p>玉城町の「担い手の育成・確保」という農業振興施策について「若い世代の担い手がない」という課題があると考えた。その課題の背景には、農家の高齢化や総人口に対して農業就業人口が少ないことなどがある。</p> <p>令和2年3月17日公表の農林水産省の農林水産統計(※1)によると、玉城町は三重県の中でも農業産出額は10位以内であり、県内でも農業に力を入れていることが分かる。また、豊かな自然環境を活かした多様な農産物がある。</p> <p>「わがマチ・わがムラ」(※2)によると玉城町の総人口は15431人で農業就業人口は720人である。ここから農業就業人口が少ないことが分かる。そして、農業就業人口のうち65歳未満が141人である。玉城町の農業従事者は半分以上が高齢者であることが分かる。また、生産年齢人口が老年人口を大きく上回っているため、若い世代に関わってもらうことが重要である。</p> <p>これらの背景を踏まえると、課題の本質は「農業について若い世代に興味をもってもらおうこと」だと考える。</p>
<p><b>あなたの考える解決策</b></p>	<p>「農業について若い世代に興味を持ってもらう」という課題の本質に対する解決策を3つ考えた。1つ目は、学校(小学校、中学校、高等学校)と連携して学校教育の中に農業と関わる授業を取り入れるということである。感受性が豊かな時期に農業と関わることで興味を持ってもらうことができると考えた。実際、自分で野菜などを作ってみると作る楽しさ、大変さなどを学ぶ。そして、地元の食材を知ってもらうことで地産地消にもつながると考えた。2つ目は、1つ目の具体的な提案で、高等学校で学修プログラムの一環として農業を手伝い、体験させることということである。皇學館大学で行われているCLL活動のように玉城町の農業について学生が主体的に取り組み、学校では学べないことを学ぶ。そして、玉城町の活性化の手伝いをするにより、お互いに良い影響があると考えた。高校生は進路を考え、選択する時期である。そのため、様々な経験が大切である。最後に3つ目は、親子で農業体験ができるイベントを考えるということである。大人だけで参加するのは、時間がなかったり、抵抗があったりすると思うが、子どもと一緒に参加しやすいと考える。イベントがあることは、幼稚園・保育園、小学校などに協力してもらい、チラシで情報を伝えてもらう。</p>

<p><b>参考書籍等</b></p>	<p>※1 令和2年3月17日公表の農林水産省の農林水産統計  <a href="https://www.maff.go.jp/tokai/tokei/kohyo/attach/pdf/index-62.pdf">https://www.maff.go.jp/tokai/tokei/kohyo/attach/pdf/index-62.pdf</a></p> <p>※2 「わがマチ・わがムラ」  <a href="http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/24/461/details.html">http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/24/461/details.html</a></p>
<p><b>課題解決にグループワークで取り組むことに関する意義、利点などについてあなたの考え</b></p>	<p>課題解決にグループワークで取り組む意義・利点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考え以外にはどのような考えがあるのか気づくことができる。</li> <li>・自分一人だと解決案には限りがあるが、グループワークをすることでたくさんの解決案がでてくる。</li> <li>・自分の意見に他の人の意見を取り入れることができる。</li> <li>・他の人の考えを知ることによって自分の考えが広がる。</li> <li>・話し合いをするために大切なことや、どのようなことをしたら話し合いがうまくいかなかったか学ぶことができる。</li> <li>・自分の意見を相手に伝えるにはどのように言えば伝わりやすいか学べる。</li> </ul>